

佐土原キリスト教会 2023年1月8日礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 13章 32～37節

説教題：目を覚ましていなさい

カナダである歯医者さんのご夫妻に大変にお世話になりました。田舎の引っ込んだ場所に大きな家を持っておられて、1階に小さな歯科医院がありました。「私達が日系の教会で仕事をしている」というそれだけの理由で色々と便宜を図って頂いたのですが、その奥さんの歯医者さんの方が伝道に燃えている方で、しかもお嬢さんが日本で英語教師の仕事をしていたということがあって、「日本人(日系人)伝道」に燃えておられました。日本人(日系人)のお客さんがいると、私達は呼ばれて行って、話をしたことでした。それだけではなく、「ホームステイの募集」をして、日本からの留学生をホームステイさせなされるのですが、一旦その家にホームステイしたら最後、クリスチャンにならなければその家を出られないという(ちょっと大袈裟ですが、でもそういう)一感でした。無理にでも神様を信じてもらう、私は「ちょっとやり過ぎじゃないかな」と思う時もあったのですが、その熱意には大いに刺激を頂きました。その奥さんの方が口癖のように言っておられた言葉があります。お世話になる度に私達が「ありがとうございます」と言うと、彼女は「私達は神様のためにやっています」と言われました。要するに、いつも神様のことを(あるいは神様にお会いする時のことを)一具体的に意識している、そういう姿を見せられたような気がしました。

今日の聖書箇所は、イエス様が「世の終わり、御自身の再臨」について預言される、その最後の箇所になります。この箇所を読んで、私は彼女のその言葉を思い出したことでした。そして「自分はどのくらい、主とお会いする時のことを意識して生きているだろうか」と、そのようなことも思わされたことでした。「内容」と「適用」と2つに分けてお話しします。

1. 聖書の内容～目を覚ましておく

32節に「その日、その時がいつであるかは、だれも知りません」(32)とあります。「その日、その時」というのは、「人の子が来る時」、イエス様がもう一度地上に帰って来られる時(再臨)、その具体的なプロセスの始まりのことです。再臨について語られる13章のこの最後の箇所で、イエス様は「再臨は必ずある、しかしそれがいつであるか御自身も『知らない』」と言われます。しかし必ずある。「その再臨を、では、どのようにして待てば良いのか」、そのことが語られるのです。ここで繰り返し語られる言葉は、「目を覚ましていなさい」という言葉です。33節「目をさまして注意していなさい」、35節「目をさましていなさい」、37節「目をさましていなさい」。なぜ目を覚ましていなければいけないのか。35節に「家の主人がいつ帰って来るか…わからない」(35)とあるように、イエス様がいつ再臨されるか分からないからです。(再臨のイメージが難しければ、自分がこの世の生涯を終えて、イエス様にお会いする時、そう考えると良いかも知れません。それもいつ来るか分からないことです)。

実際、次の14章に入ると、イエス様は、ゲッセマネの園で十字架を前にして必死になって祈られますが、その時に、ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、眠りこけてしまうのです。イエス様は言われます。「シモン、眠っているのか。1時間でも目をさましていることができなかつたのか。誘惑に陥らないように、目をさまして、祈り続けなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです」(14:37～38)。まして1時間どころではない、神学者は「34節の言葉は、長い期間の留守を示唆した言葉だ」と言います。期間が長くなればなるほど、いつの間にか目を閉じてしまう、私達は眠り込んでしまうのです。そこでイエス様は繰り返し「目をさましていなさい」と語られ

るのです。

「目をさましていないさい」とは、具体的にはどうしていることでしょうか。34 節に「それはちょうど、旅に立つ人が、出かけに、しもべたちにはそれぞれ仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目をさましているように言いつけるようなものです」(34)とあります。旅に発つ人はイエス様です。「イエス様が出かけに—(つまり復活して天に帰って行かれる時に)—しもべたち(弟子達)に、それぞれ仕事を割り当てて責任を持たせ(た)。「門番には目をさましているように…」も同じ意味のことが繰り返されていると考えて良いでしょう。要するに、イエス様は弟子達に—(それに続く教会の人々に、私達に)—「後はよろしく頼む」と御自分の仕事を割り当てて、割り当てただけでなく、「責任を持たせて」—(「新改訳」の欄外注では「権限を与えて」となっています)—つまり割り当てた仕事をするために必要な権威(権限)も与えられた。ですから弟子達は、それに続く教会の人々は、私達は、その働きをすることを心の中心に置かなければならないのです。

その仕事とは何か。「マルコ 3 章 14~15 節」にこうあります。「そこでイエスは 12 弟子を任命された。それは、彼らを身近に置き、また彼らを遣わして福音を宣べさせ、悪霊を追い出す権威を持たせるためであった」(マルコ 3:14~15)。「イエス様の身近にいること、(そして)福音を宣べること、悪霊を追い出す権威を持つこと」、それが弟子の為すべき仕事として記されています。また「マルコ福音書」でイエス様が天にお帰りになる前に言われたのは、「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」(マルコ 16:15)という言葉でした。

FEBC のラジオの放送で、ある牧師のお証しを聞きました。その先生は教会の中で色々な問題に出会うわけですが、でもその時に「聖書の御言葉がどんなに力強いものかを改めて知った」と言っておられました。また教会の人を慰めたくても、慰める言葉がない。その時に「聖書の言葉が人に慰めを与える力を持っていることを改めて知った」と言っておられました。私はその放送を聴いて、私自身もう一度「生ける神の言葉」を慕い求めるような思いを与えられました。「イエス様の身近にいる」とは、「御言葉の近くにいる」ことでしょう。御言葉は、キリスト者が前に進んで行くための唯一の武器です。弟子は、御言葉の近くにおいて福音を宣べ伝えるのです。それが、教会が(私達が)イエス様に委ねられている仕事なのです。

もちろん「自分の信仰を守って生きる、それだけで精一杯」という気持ちになることがあります。「これ以上『伝道しなさい』等と言ってくれるな」と、そういう思いにもなります。またこの異教社会の中で、どうやって伝道して行けば良いのか、途方にくれることもあります。しかし、私達が今「信仰を持つことが出来たことを喜び、感謝して生きている」、その背後には、私達に(あなたに)信仰を伝えてくれた誰かがいたはずです。誰かが労してくれたはずです。誰かが祈ってくれたはずです。(私にも長い間、祈って下さった方があります)。そうやって私達は、信仰をただもらったはずです。「あなたがたは、ただで受けたのだから、ただで与えなさい」(マタイ 10:8)。今度は、私達が伝えなければならないのではないのでしょうか。

「アルファ・コース」のガンベル先生がこんな話をしていました。先生に長男が生まれた時、彼は前もって作っておいたリストに従って順番に電話をかけて「誕生」のニュースを伝えました。ところが、3 番目のくらいの人から後の人は、彼が電話をした時には、もう知っていたというのです。最初に電話をもらった人が誰かに電話をして、誰かが誰かに電話をして、そのニュースは広がって行った。彼が言うのです。「同じように、もしキリスト教が福音—(喜びの知らせ)—であるなら、伝えるのが当たり前ではないか」。森繁さんも「本当に信じているなら、伝えるのが当たり前だと思う」と言いました。また彼は「伝える中で信仰が育てられて来たよ

うに思う」とも言いました。具体的に「何か出来る、出来ない」ではなくて、この個所が語るのは、そのことを私達の「信仰生活の目的」として置かなければならないということではないでしょうか。そして、それはまた「教会の歩みの中心にもそれが据えられなければならない」ということだと思います。

確かに難しいです。自分が信仰を持って歩くだけでも大変です。しかし、だからこそ、権限(権威)が与えられているのです。悪霊を追い出す権限とは(難しい話ですが)私達を攻撃して来る、私達の働きを邪魔して来る悪と闘う権限を、罪と闘う権限も、与えられているということではないでしょうか。私は、ある時「悪霊の攻撃を受けている」と強く感じた時期がありました。その時、あるカウンセラーの方と話をしました。彼女によると、色々な教会が、またキリスト者が、悪の攻撃を受けていると感じる経験をしていると言うのです。そして、悪霊払いとか、色々なことを、教会はしているようです。私が感じたのは、教会は、信仰者は、イエス様に守られている、ということです。悪霊は攻撃して来るかも知れない。私達の働きを邪魔してくるかも知れない。しかし、「主は強ければ、我弱くとも、恐れはあらず」と讚美歌にある通り、私達は、イエス様に寄り縋って、助けて頂いて、そこを歩いて行くことが出来るのです。

35 節に「家の主人がいつ帰来るか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、わからない…」(35)とあります。ここで時が 4 つに区切ってあります。昔の見張りは、こういう様に交代して見張りを続けたのです。私達の教会もある時、「祈りの課題」のために、連鎖祈禱をしました(「何時から何時は誰、何時から何時は誰…」と時間を分けてそれぞれに受け持って祈りました)。似たようなことではないでしょうか。私達も 1 人でこの働きに心を配り続けることは出来ない。一緒に礼拝して、一緒に霊の糧を頂いて、与えられている権威を確認して、皆で力を合わせて、イエス様に割り当てられた仕事に勤しみながら再臨を待つのです。誰一人「私には仕事は割り当てられていない」と思っているはいけません。37 節に「わたしがあなたがたに話していることは、すべての人に言っているのです」(37)と言われている通りです。「すべての人」が期待されているのです。

こんな話があります。「イエスが天に帰られた後、天使の長が訪ねました。『あなたの仕事はどうなりますか』。イエスは言われました。『私はペテロ達に私のことを伝えるように頼んだ。他の人々はさらに別の人々に伝え、また別の人々は、最も遠くの地に居る人々まで伝えて行くだろう』。天使長は言いました。『ペテロ達の後の人々があなたのことを他の人々に伝えなかったらどうするのですか』。イエスは答えられました。『私は彼らを当てにしています』。(あなたも、私も、イエス様から当てにされているのです)。

その仕事を、イエス様が来られるまで(イエス様にお会いするまで)続けるのです。イエス様がいつ来られるのか、分らない。でも分らなくても良いのです。私達はそのことは、父なる神様に委ねて行けば良い。委ねて自分達に与えられている仕事に勤しむのです。

2. 信仰生活への適用～弱さをもって証しに励む

この個所から「適用」というか、「具体的なあり方」を少しお話ししたいと思います。(私事になるかもしれませんが、ご容赦下さい)。

初めにカナダの歯医者さんのお話しをしましたが、私にはこんな経験があります。ある時、その歯医者さんから電話が掛って来ました。「今、家に日本人が来ているから、あなたはすぐに来て福音を伝えなさい」という電話でした。とりあえず行きました。広い家の庭に面した部屋にその方と私と 2 人きりにされて、「2 人きりにしたから、さあ、話しなさい」と仰るのです。

初めて会った方です。その方のことを何も知らない。何を話せばよいでしょうか。私は、何を話して良いか分からなかったのので、そして鬱で入院して、退院間もなかったこともあって、鬱で入院した話をしたのです。苦しかったこと、しかしそこで神様に触れて頂いたこと、そんなことを話しました。そうしたら、熱心に聞いて下さったのです。たった1度の出会いでしたが、その方はアメリカ在住の日本人で、1年後にもう1度カナダに来られ、教会に来て下さいました。その時、その方はクリスチャンになっておられました。私が何かとした、ということでは決してありません。むしろ、自分の弱さ故の恥かしい話をしたのです。(ある時などは「クリスチャンは強いと聞いたけど、クリスチャンも鬱になるのですな」と言われて、神様に申し訳ないような、恥ずかしい思いをしたこともあります)。しかし、私は思いました。私達が神様を経験させて頂くのは、もしかしたら自分が弱い時ではないでしょうか。いかに、神様なしではやって行けないか、あるいは、どんなに神様が憐れんで下さったか、そういう証をして行けば良いのではないのでしょうか。(もちろん、一例ですが…)。

先日、ある方からメールを頂きました。ある冊子の中にあつた1人の牧師のエッセイを取り上げて、「あなたにも読んで欲しい。もし持っていなかったら持って行くから」と書いてありました。その冊子は、私のところにも届いていましたから、私もすぐに読みました。それは1人牧師が鬱を患った証しでした。「私は1か月ほど入院しました。生きていることの1分1秒が辛くて、のたうち回るような感情が数か月続きました…」、そのように書いてありました。しかしその先生は、「その神様に祈らざるを得ない状況の中で『祈る』ということを学んだ」と証ししておられました。

私達は弱い存在です。しかしその弱さを語る時、私にメールを下さった方が心に迫られるものを感じられたように、そこに働かれる神様をお証し出来るのではないかと、そんなことを改めて思わされたことでした。

しかし、その時に大切なことが2つあると思います。1つは、先程も申し上げましたが、「御言葉の近くにいる」ことです。鬱を患われた先生も、癒しの過程で、御言葉を1つ、心の中で反芻すること続けられた、とありました。私は、先日「アナバプテスト・セミナー」で話をしたのですが、アナバプテスト・メノナイトが、迫害の中でも立って行った、広がって行った、その1つの理由は、聖書の学びです。普通の主婦が、カトリック、プロテスタントの第1級の学者と互角に議論が出来たというのです。聖書の言葉で議論したのです。これも申し上げた通り、信仰者の唯一の武器は、聖書の言葉です。神に割り当てられた仕事(働き)をして行くためには、自らが御言葉に支えられ、励まされて行くことが大切だと思います。

もう1つは、「福音を宣べ伝える」ということは、結局は『神の愛を伝える』ということなのではないかと思わされるのです。神の愛をどうやって伝えることが出来るのか。もちろん、「言葉で語る」ことも大切です。しかし「言葉で語る」その根底には「その人に仕える」という観点がなければ、神の愛を上手く伝えることは出来ないのではないかと思います。ある時、ある方が「私達に出来るのは、ただ身を低くして、証を立てて行くことだけです」と言われましたが、正にそういうことだろうと思うのです。これもアナバプテスト・メノナイトの話になりますが、権力者が彼らを迫害していた時代、しかし一般の人達は、アナバプテスト・メノナイトの生き方を見て、彼らに心を開いて行くのです、彼らを受け入れて行くのです、助けて行くのです。御言葉と、謙遜な、愛と憐れみと平和な生き方、そこに支えられた証しを、神様が用いて下さるのではないのでしょうか。

私は、臆病です、力なき小さい者です。自分で良く知っています。しかし、臆病な者、力な

き者にも、神はそれに見合った仕事を委ねて下さると思っています。例えば、家族に接する中においても、「福音を伝える」、その思いを心の中心に置く時、神は、私達に「仕えること」に生きることが出来る権威(権限)を与えて下さるのではないのでしょうか。心の中の悪(自我)と闘い、「低き」に立つ権威(権限)です。弱さも何もも、全てを主に委ねて、主が来られる時まで、主にお会いする時まで、いつ主にお会いしても良いように、割り当てられている「主の仕事」に生きて行きたいと願います。やがてイエス様が言って下さいます。「よくやった。良い忠実なしもべだ」(マタイ 25:21)。